

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 9 月 5 日現在

機関番号：32642

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25350782

研究課題名(和文)多様な身体とスポーツ文化の表象力 北米ネイティブ・イスラーム社会の事例からー

研究課題名(英文) Cultural expression of the artful physical power extracted from traditional sports in North America Salish group and Teheran, Iranian republic society

研究代表者

山口 順子 (Yamaguchi, Junko)

津田塾大学・学芸学部・名誉教授

研究者番号：70055325

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：二つの伝統文化圏の「身体技法」を抽出し、民族文化の変容と多様な身体・スポーツ文化の表象特性を検討した。一つは、北米太平洋岸地区ワシントン州先住民(セイリッソ語族)の伝統を創るイベント「癒しのカヌー・ジャーニ」の現地調査にみるグローバルテクノロジー社会の進展と基層文化の変容である。他の一つは、テヘランにあるズールハーネの市民施設、及びナショナル選手を育成する国立ズールハーネセンターや各種連盟における現代的課題や国際大会を志向した選手養成指針についての聞き取り調査である。伝統文化「ズールハーネ」の精神性と現代的潮流 文化表象としての身体技法について学会報告した。二つの伝統文化圏の事例研究である。

研究成果の概要(英文)：How does cultural expression relate to individual body-self experiences? Two examples of physical cultures were extracted from the traditional sports and training performances. Fieldworks were done at the Salish Sea, in the West Coast of Washington State, US, and the Zurkhanehee (the House of Strength as well as the physical training), in Tehran, the Islamic Republic of Iran, respectively. Two examples were investigated by the ethno-science approach. In the West Coast, Native American "Canoe Journey Project" for three weeks in summer time was explored for the inter-cultural Nations' identities, which constructed to a renewal of the tradition in a global society. In Teheran, the characteristic features of Zurkhanehee were explored for the House, performers, instruments, genders, history and ritual routines in Muslim. The polarization of the physical culture in a society was evidently seen. Two examples of the cultural transformation were shown.

研究分野：スポーツ人類学

キーワード：身体技法 アート力 文化変容 間身体性 アイデンティティ 民族スポーツ

## 1. 研究開始当初の背景

本研究者は、主流社会から距離をとったところにあり、現代のスポーツメディアがあまり取りあげない民族に固有な伝統スポーツ文化に注目し、人間にとっての「スポーツの根源的意味」、あるいは「多様な身体」にかかわる「文化特性」をさぐる研究を進めてきた。つまり、スポーツなどの身体運動が、歴史的・地理的・社会的背景をもってさまざまな特性に関わっていることに関心があった。さらにまた、ヨーロッパ近代に端を発する競技中心の近現代スポーツがどのように「個の尊重」や「well-being、ウェルネス」につながっているのか、あるいは「近現代スポーツは多文化共生を実現しうるのか」という批判的な問いかけをもっていたので、民族、ジェンダー、信仰、置かれた地位や背景等、多様な個の身体的世界の文化表象力を探る研究を構想していた。

そもそも、人間の生活世界、環境世界に見られる身体の固有な特性を、走り方や歩き方、泳ぎ方などの活動する身体レベルにまで引き上げて「身体技法」(techniques du corps) の概念で説明したのはフランスの社会学・文化人類学者の M・モースである。モースは、身体が、生物的・遺伝的に基礎づけられるだけでなく、背後にある共同性、習慣性、社会性を備えた人々の感覚や経験に内属する身体能力(という文化現象)であることを示唆したのであり、これによってスポーツなどの身体運動の文化研究がいつそうの広がりをもつことになると考えていた。

## 2. 研究の目的

(1) 長い歴史をもつ二つの事例、(A) 北米ネイティブの生活に密着した固有な身体技法、(B) 現代スポーツ文化の参入に独自性をもって進展するイスラームの身体技法を取りあげ、第1に、「身体技法」が、多様な「個」を尊重する「共生社会」の文化変容装置になりうる契機を具体的に提示することである。

第2に、身体が、自他の相互主観性をもって社会の基層で多様な影響を与えている事例を提示することであった。

## 3. 研究の方法

### (1) 文献研究の実施

民族に固有な身体技法を考えるため、『パフォーマンス研究』(シェクナー; 高橋 訳 2000) を参照し、多様なレベルの身体技法を分断せずに捉える方法をとった。即ち、生の営みと密接に関わる複合身体を、「日常レベル」-「固有な運動レベル」-「治療や癒しのレベル」の連続体(三位一体)として把握することである。

例えば「play」と「ritual」を両極に据え、game- sport- entertainment- performing art- daily life の連続体(continuum)として多様な身体レベルの「経験のまとまり」を考えることである。

各種キーワードの検討を実施し、民族のもつ「身体文化」の調査には、多様な視点を包摂できる<エスノ-サイエンス>の概念(寺島・篠原、2002)を参照した。また癒しの身体技法には、日野原重明氏が説く「サイエンスとアート」の考えを参照した。即ち、<サイエンスの対象は disease(疾患)であるが、アートの対象は disease をもって悩んでいる人である。そして疾患をもって悩んでいる、心を苦しめている状態が illness(患い、不健康)であり、それに対してはアートが対応するのである。> この考え方によって、従来の研究では繋がらなかった日常レベルと固有な身体運動レベル、治療や癒しのレベルの身体経験を統合的につなぐ「臨床の知」、あるいはスポーツやダンス・パフォーマンスなどの「実践の知」、「フィールドの知」、「ウェルネスの知」として学問的に位置づける理論的準拠枠とした。

### (2) 二つの身体技法の現地調査の実施

古代アジアの民とも言われる北米ワシントン州キトサップ郡ピュージェット湾岸に居住するセイリッシュ語系のスコミッシュ族 (Suquamish) とスクラム族 (S'Klallum、strong peopleの意) は、1855年にアメリカ合衆国政府と土地の分配、漁業権の交渉に当たったチーフを有する部族で、現在もセイリッシュ語系共同体のリーダー的役割を果たす。

・現地調査は、2013年7月10日から8月5日の期間に実施し、その後も適宜訪問している。

・ワシントン州全体のネイティブ・アメリカン (北米先住民、インディアンとも呼ぶ) は37部族。そのうちの23部族がセイリッシュ語系である。同じ言語グループに属していても言語はさらに枝分かれしており、部族間の相互交流は英語である。23部族を巡り宿泊をともして3週間にわたり「伝統的な生活文化としての種々の身体技法を学ぶとともに、仲間と相互依存する経験のまとめり (精神文化、社会文化、技術文化) を習得する。

・23部族から、100隻の河川カヌーが参加する。一隻に6-10人が乗船するので総勢1000人近くのpuller (引き手) が集まる。若い男女と成人が一体になって、その年のゴール (目的地: ホスト地) をめざす。危険を回避しながら3週間にわたって「先祖の生活文化」を体験する。目の前がまったく見えなくなるほどの濃霧の時間も多く、水路を間違え危険に遭遇することもあるので、水域では巡視艇が待機する。環太平洋地区の身体技法とも共通するカヌー技術だが、河川カヌーは細く不安定なため繊細な技術が不可欠である。

・プロジェクト「癒しのカヌー・ジャーニ」の目的は、先人の知恵と現在の若者の夢をつなぐ共同体の人材育成として、アルコール・薬物依存から抜け出す「癒しの旅」である。薬物依存症の回復は、シアトルにあるワシントン州立大学ウェルネス研究者グループとのコラボ (共同作業) である。

・民族のアイデンティティ意識の高まりは、全米で60年以上繰り返されてきたスポーツで使用される「インディアン・マスケット」の撤廃運動が、スポーツ文化の表象力の事例として提示される。

イスラームの身体文化の現地調査では、首都テヘランにあるズールハーネ (4カ所) を訪問し、そこに集う人々や運営に携わる人々への面談による聞き取り調査を実施した。

・現地調査は、2010年から始め、2012年から2016年3月まで、適宜、現地訪問を実施した。とくに、これまで調査したイラン各地の「伝統的な生活文化としてのズールハーネ」とは異なる「国際スポーツとしてのズールハーネ」の諸相を考察する。また、イラン・オリンピック委員会を訪問し、女性アスリートに関する資料収集と面談によるイランにおける現代の伝統スポーツと独自の近代スポーツのそれぞれの特性を調査し、調査結果を分析する。その際に、解釈論としてのエスノサイエンス (ethno-science) の方法を参考にした。即ち、現地調査の中で聞き得た「伝統的な知識」「地域に広がる知恵」「そこに住む人々の信念」といった「経験の束」(寺島、2002) から導き出される世界観の読み解きを身体運動の文化表象力として抽出し、学会で報告する方法をとった。

#### 4. 研究成果

##### (1) 北米ネイティブの事例から

・1989年ワシントン州100周年記念以降、各地は大きく刷新し、シアトル市郊外に居住するネイティブ部族 (インディアン) の生活も変容している。ちなみに、シアトル市はビル・ゲイツの郷里であり、市の図書館には早くから500台近いコンピュータが寄贈され充実し、航空会社ボーイング社をはじめ、観光産業では球団シアトルマリナーズ、レーニア山 (世界遺産) オリンピック国立公園 / 州立施設など四季の自然に恵まれた地域であ

る。さらにカジノの合法化によるワシントン州の経済効果、先住民に関連する法整備（アメリカ先住民美術工芸品、1990年墓地保護・返還法制定、1990年障害を持つアメリカ人法（ADA、ユニバーサル/インクルーシブデザイン）、持続可能な開発への取組み、2004年ワシントンDCに国立インディアンミュージアムが建設された影響もあり、ネイティブ自身の民族意識が高まり、伝統文化のリニューアルが活発になっている。

スコミッシュ族、スクララムの族もシアトル近郊に居住し、各種文化施設も充実する。

伝統的な生活文化を表象する「癒しのカヌー・ジャーニ（人材育成）」は、一つの「創られた伝統」（ボズボウム他編、1992）として捉えられる文化装置である。即ち、当該プロジェクトが単なるカヌー競技大会ではなく、生活の手段であった自らの Nations（国）のアイデンティティ意識の象徴として実施されているのである。例えば、浜辺にカヌーが近づいてくると、少人数のグループが太鼓でリズムをきざみ短い旋律の歌がはじまり、仲間に知らせ、セレモニーがはじまる。カヌーには贈り物や食物を運び、生活を支える象徴的意味もある。舟がどの共同体のものであるかは、カヌー先端部の木彫りのデザインで即座に判別できる。

・ 舟が海岸（浜）に到着すると、カヌーごとのセレモニーがはじまる。まずグループのキャプテンが部族の言語で、カヌーの中から共同体のホスト/ホステスに上陸してよいかと大声で尋ねる。その後聴衆にも分かるように、Come ashore? と英語で高らかに声をあげる。すると、(Yes,) Come ashoreと返答が来る。これで交渉が終わり上陸になる。カヌーは協力して浜辺に運び上げられる。

・ 1989年の100周年記念時に「カヌーでシアトルまで行こう」とシニアの発想ではじまった当初は、一握りの参加者だったが、近年、部族の参加者も増え、最終日の観衆は1万人

近くであった。若者の挑戦をつなぐ「文化表象力=文化を生きる身体技法の描写」プログラムとなっている。

・ カリキュラムの実習は11のセッション（航海技術、儀式、文化活動、伝統的な語りなど）から構成される。

さらに言えば、定期的な練習が部族の人材育成を支えており、プロジェクトの期間中は、セックス、喫煙、暴力も禁じられ、共同体によっては自殺も禁じられる（実際、自殺率が高い）。見知らぬ仲間との食事、伝統ダンスや「語り」の共有化を通じて「創られた伝統」はグローバル化社会の進行とともに確実に浸透していることが明らかになった。

「癒しのカヌー・ジャーニ」の身体文化から抽出された諸価値は、「勇気ある先祖への尊敬（平和・祈りの価値）」、「他者や仲間への尊敬（倫理的価値）」、「長距離を通じての仲間との協力、パドリング技法の習得（成就達成の価値）」、「自他や環境世界とのスピリチュアルな交流（美的価値）」などである。これらはスポーツパフォーマンスに通じる教育的価値でもあるが、「パドリングは祈り」という喩えにはネイティブに固有な世界観、自然観（身体観）が内包される。

最終年の平成27年度に実施したのは、北米ネイティブ・スピリットを描写する<レッドスキング>のモチーフ（チーム名に使うインディアンの名称、ロゴマークやマスコットを含む）の撤廃運動の調査である。

インディアン・モチーフのスポーツ使用は、「人種差別/偏見なのか、それとも名誉なことか」の論争を調査するため、87年間にわたるロゴ使用の歴史をもつ、ワシントン州立ポートタウンゼン高校の選手、卒業生及びコミュニティ支援者を巻き込む6ヶ月間（175時間）の会議報告資料を入手し、1960年代から全米で展開されてきた人種差別運動も参照しつつ、同高校が「レッドスキングからの撤退」を決断した背景を検証した。

・全米のインディアンミュージアム（スミソニアン博物館）の訪問、面談作業も実施し、口ゴモチーフの歴史的背景をさらに整理して、集合身体の相互依存性（間身体性）の特性についても検証している。

## （２）イスラーム社会の事例

初年度は、イスラーム文化の伝統的なライフスタイルを生きる身体技法として、イスラーム女性のスポーツおよびズールハーネなど伝統スポーツの調査のため、イラン共和国のテヘランにおけるイスラーム諸国女性スポーツ連合（The Islamic Countries Women's Sports Solidarity Council : ICWSC）をはじめ、各種競技会を束ねる国際機関および地域の競技会や委員会、博物館、図書館、教育委員会での面談を実施した。イギリス国立公文書館、大英博物館等において、遊びやスポーツに関する資料の検索・閲覧及び複写等による資料収集、また大英博物館部長、歴史家などとも面談し、資料閲覧及び情報交換を行った。

最終年の平成27年度は、テヘランにある4か所のズールハーネ及びナショナル選手を育成する国立ズールハーネセンターやイラン・ズールハーネ連盟を訪問し、現代的課題や国際大会を志向した選手養成指針について運営担当者からの聞き取り調査を実施した。

平成25年度から27年度において実施した現地調査の結果をまとめ、日本スポーツ人類学会第17回大会において口頭発表を行った（演題：「ズールハーネ」の精神性と現代的潮流～文化表象としての身体技法）。また、昨年度に引き続き、イラン・オリンピック委員会を訪問しイスラーム女性スポーツ大会運営に携わったスタッフと初めて面談することができたが、主催者との面談や詳細な資料等の提供は先方の意向で来年度以降に持ち越された。しかし、本研究期間において今後の研究課題が新たに準備され発展的な研究成果への基盤を整えられたと考えている。

文化表象としての「ズールハーネ」の現地調査の対象は次の通りである。

2012-2016年の現地調査対象（テヘラン）ズールハーネ・シャヒード・ファミーデ（人名である）1954年創立、国立ズールハーネセンター（イラン・ズールハーネ・アカデミー併設）・パフラバーン・プール・スポーツセンター）、ガッスル・ズールハーネ（ガッスル博物館）、チザール（イラン暦1359年＝西暦1980年）、イラン・ズールハーネ連盟など。

テヘラン市内のズールハーネ（地域向け）・パフラバーン・プール・スポーツセンター、ガッスル博物館ズールハーネ、チザール

そもそもズールハーネは「力の家」と訳され、身体鍛錬の場＝トレーニング場を意味するが、同時にそこで行われる心身鍛錬（トレーニング種目あるいはパフォーマンス等の身体運動の内容、さらには競技名を意味する（力技、古式体操、古式スポーツなどとも表記される）。古代ペルシャ帝国の軍事力を支えてきた「パフラバーン（Pahlavany）」で、現在でも当該種目の優れた競技者をパフラバーンという。

・パフォーマンス（音楽と詩）はモルシェッド（Morshed=師）という歌い手のたたく太鼓や鐘の演奏に合わせて行われる。（略）

・伝統的建物と風習（イスラームとの関係）  
・ズールハーネの入り口は低く小さい。敵から逃れるために地下に造ったともいう。そもそも「身体能力のあるものは謙虚に」という教えのもと、ズールハーネでも力のあるものほど控えめにとりいう考えから、競技のリングはゴウドと呼ばれ低い位置に造られる。八角形はペルシャ語の数字・ハシュトの形からParadise Gateと呼び、天国への門の意味である。集う人の意識と作法は、はじめに祈り、ゴウドには右足から入る。始めと終わりにゴウドの床に敬意のキスをする。長幼の序、力

のあるものはより謙虚に。パフォーマンスは男性のみ。

・「文化表象としてのズールハーネ」は、ムスリムとしての在り方・イスラーム社会の持続を体現する。礼儀・作法、地域の連帯・世代間交流、ペルシャ文化・歴史の尊重、男性文化である。身体鍛錬ではあるが、そこに流れる精神性を重んじ、イスラームの教えやペルシャ文化の末裔だという誇りが垣間見える。国際社会への進出（現代機能）は競技連盟の成立（組織化）、競技化と国際大会の開催（国際化）、文化遺産登録、観光事業の強化があげられる。

・ズールハーネにも二極化が見られる。地域文化（日常性）と、競技スポーツ（非日常）の2側面である。地域文化の特性は、イスラーム文化の教えの遵守、地域の共同体としての連帯、伝統的礼儀・作法の伝承、ペルシャ文化の口承、（パフラバーンへの尊敬）、健康・体力づくり、カルチャーセンターの機能、（余暇活動）などの要素である。また、競技スポーツとしての特性は、ユネスコ無形文化遺産、海外公演、イラン・ズールハーネ連盟、ズールハーネアカデミー、国立ズールハーネセンター、国立競技大会、レスリング競技との連携（身体鍛錬の近代スポーツ化？）、アスリート＝パフラバーン、国際化・観光事業、などの要因である。

### （3）全体のまとめ

二つの事例を通して多様な身体とその実践課題を検討し、文化表象としての身体技法が果たす役割を検証した。通時的な伝統を保持しつつ、相互依存の生活文化のリニューアルを意識的に進める民族の姿、および固有な身体技法を保持しつつ、国際社会への参画をめざす（共時的）民族の姿が抽出された。

### 5．主な発表論文等

〔学会発表〕（計5件）

荒井啓子、文化表象としての「ズールハー

ネ」の精神性と現代的潮流、日本スポーツ人類学会第17回大会、立命館大学、2016. 3.28-29.

山口順子、北米ネイティブ Salish 語族におけるスポーツ・マスコット撤廃のジレンマ、日本スポーツ人類学会第17回大会、立命館大学、2016. 3.28-29.

Junko Yamaguchi, A culturally diverse vision of the inter-performing-body as related to the Inclusive Design, The 43th conference of the International Association for the Philosophy of Sport, Cardiff, Wales, UK, 2015. 9.02-05.

Junko Yamaguchi, Enhancing the cultural identity through the body-self unity in the Native American Canoe Journey Project, The 42th Conference of the International Association for the Philosophy of Sport, Natal, Brazil, 2014. 9.03-06.

山口順子、北西海岸ネイティブ・アメリカンの文化アイデンティティ意識にみるカヌー・ジャーニー・プロジェクト、日本スポーツ人類学会第15回大会、東京学芸大学、2014.3.27-28.

〔図書〕（計1件）

山崖俊子・山口順子編著、勁草書房、健康教育：表現する身体、2015、総頁190.

〔その他〕

山口順子、希望への意志と支え：ネイティブ・アメリカンの表現文化、津田塾大学ウェルネス・センター報告書所収、2016、印刷中。（査読なし）

### 6．研究組織

(1)研究代表者

山口 順子 (Yamaguchi, Junko)  
津田塾大学・学芸学部・名誉教授  
研究者番号： 70055325

(2)研究分担者

荒井 啓子 (Arai, Keiko )  
学習院女子大学・国際文化交流学部・教授  
研究者番号： 50082938